



1986・8

第 27 号

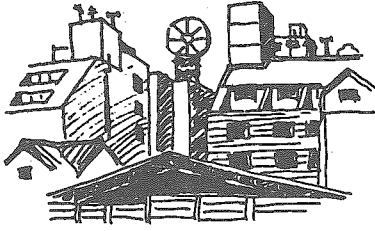
しろこぼと

日本野鳥の会 埼玉県支部



オオヨシキリ（ヒタキ科ウグイス亜科）この日、秋ヶ瀬公園に行った。「工事中立入禁止」の看板をあとに、オオヨシキリが数多く見られるヨシ原に到着。昨日まであれほどいたオオヨシキリが激減している。あのヨシ原が一面黒土の広場になっていた。黒い広場の上には1台のブルドーザーが置かれていた。帰途、1羽のオオヨシキリがどこからともなく飛んできて、真赤な喉をふるわせ、さかんに鳴いた。何かを訴えるかのようなその姿が哀れに感じられた。人間の非情に泣いていたのかもしれない。

（写真と文・正田 茂）



都市鳥 を調べる

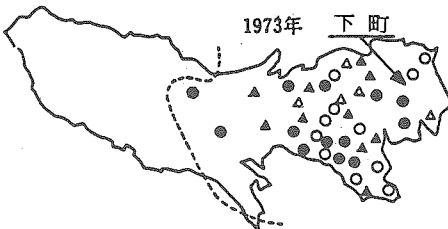
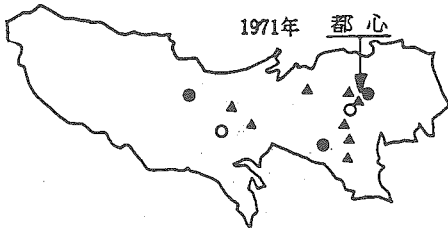
8月は、はざかい期。街に住む鳥(都市鳥)にも、もっと目を向けてみましょう。じっくり観察していると、新しい発見や興味深い行動が見られるかもしれません。今月号は、都市鳥の研究で活躍の川内博さんに、都市鳥について語ってもらいました。

マンション族ヒヨドリの出現

ベランダに身を乗り出し、日ごろの行動を聞いている我々の横をすり抜けるようにして、ヒヨドリは70cmと離れていない目の前の巣に飛び込んできた。一瞬我々の会話は止まり、まじまじとヒヨドリの顔を見つめてしまった。



点線の西側では、それまでも繁殖期に生息していた



- 繁殖確認 ▲ 繁殖の可能性あり
- 繁殖の可能性大 ▲ 繁殖期に生息

図・東京の平地部におけるヒヨドリの繁殖拡大(1968~1973)(川内・藤本, 1974).

6月下旬、マンション6階のベランダの植え込みにヒヨドリが営巣したとの知らせで、東京都心の南麻布へ出かけた。

幅1mくらいのベランダに、3個のコンクリート製のプランターが置かれ、そこに人の背丈ほどのカイヅカイブキが6本植えられ、その1つに細い枝やポリエチレンのひもを使った丸い巣が架けられていた。おもしろいのはその位置で、マンションの外からは葉陰になっているが、室内からは丸見えで、前日孵えったばかりのヒナの世話をする親鳥の一部始終が、イスに座ったままで観察できる状態であった。そのあまりの大胆さに人間の方が遠慮し、日ごろはレースのカーテンがひかれているが、ガラス戸を開けて、双眼鏡を向けながら、ふつうにしゃべっていても別に気にする風でもなく平気な顔をしている。逆に向いのビルの屋上で鳴くハシブトガラスには注意を向ける。そんなヒヨドリのように、この家の主人である伊勢谷さんご夫妻はご満悦であった。

変身したヒヨドリ

ヒヨドリが東京の街中で子育てをするようになって、かれこれ15年が経つ。それまでは4月末には姿を消し、10月初めにやってくる完全な漂鳥だったが、1960年代半ばごろから越冬するようになり、後半にはコートシブや幼鳥が見られだした。そして70年代に入ると都心にも進入し、緑がわずかしかない下町にまで定着し、今ではスズメ・ドバトに並ぶ、代表的な留鳥となっている。しかもこの変化は東京や埼玉などの首都圏だけでなく、

本州から九州までの各地で一斉に起こった現象である。(図)

ヒヨドリは南方系の森林性の鳥で、繁殖期には森の中から出ないとされていて、そのため緑の少ない東京の平地部では繁殖できないと考えてきた。ところが進入してきたこの鳥の生態を追ってみると、従来のようにと違うことに気付いた。

森林性ならば、東京都心に入ってきた場合、まず緑の豊かな明治神宮や自然教育園などに住みつくと思われるが、実際は庭木や街路樹、小公園や学校の樹木へ営巣し、大きな緑地への定住は数年遅れている。また食性も漿果や花蜜を好む傾向はあるものの、パンやご飯をはじめ、ビスケット、ポップコーン、牛脂、牛乳などを口にするという雑食性を示している。さらにほとんど地上に降りなかったのがゴミ箱あさりをしたり、ヒトの投げる餌を空中で捕食する姿なども見られている。

人工環境の出現

1964(昭和39)年、秋晴れのもとに響

いた東京オリンピックのファンファーレは、ある年代以上の人にとっては今も心に残るエポックではないだろうか。しかしそれは単に個人の段階にとどまらない、日本全体に新時代を告げる合図でもあったようである。

「世界最大の村落」と呼ばれていた東京が、自然を切り離し、人工的な都市へと変身していったのはこのオリンピックが一つの大きなきっかけであった。そしてその流れは全国的に広がり、日本各地にコンクリートとアスファルトと鉄とガラスを主体とした人工環境が出現した。これは日本にとって初めて経験することであり、そこに住む生物にとっては画期的な出来事であったに違いない。

新しい器には新しい酒をのたとえ通り、今までなかった環境には今までいなかった生物が対応するのではなかろうか。そんな見方で東京市街地の繁殖期の鳥相を戦前と現在とで比較してみたところ、明らかに違いがあった(表)。それを一口でいうと「戦前には森林性で動物質食の夏鳥が4割もいたのに、現在では疎林性で雑食または植物質食の留鳥では

表・東京の市街地(現在の23区および三鷹・武蔵野市)における繁殖鳥の比較。(川内1983)

	(A) 大正~昭和初期	(B) 現在(1975~1982年)
(I) 都心の繁華街や住宅地などに数が多く、普通に繁殖している鳥	スズメ, ムクドリ, シジュウカラ, ツバメ ^S , ハシブトガラス, カワラヒワ, キセキレイ, トビ [†] , サンショウクイ ^{†, S} , コサメビタキ ^{†, S} , ゴイサギ, アオバズク ^S , モズ, カワセミ (14種)	スズメ, ムクドリ, ヒヨドリ [△] , キジバト, シジュウカラ, オナガ, カワラヒワ, ハシブトガラス, ドバト, ツバメ ^S (10種)
(II) (I)の地域で数が少ない鳥, または周辺の住宅地や水辺だけに普通に繁殖している鳥	ホオジロ, ヒバリ [†] , オナガ, キジバト, サンコウチョウ ^{†, S} , メジロ, アカモズ ^S , チゴモズ ^{†, S} , ハシボソガラス [†] , コジュケイ, ササゴイ ^{†, S} , ドバト, オオヨシキリ ^{†, S} , カルガモ, カイツブリ, ヨシゴイ ^{†, S} , ヒクイナ ^{†, S} , パン, カッコウ ^{†, S} (19種)	コジュケイ, メジロ, カルガモ, カイツブリ, ハクセキレイ [△] , キセキレイ, ホオジロ, モズ, アカモズ ^S , アオバズク ^S , パン, イワツバメ ^{△, S} , カワセミ (13種)
(III) 特定の場所だけで繁殖している鳥	オシドリ, キジ, ヤマガラ, カワウ, コシアカツバメ ^{†, S} (5種)	オシドリ, キジ, ゴイサギ, ヤマガラ, カワウ (5種)
	(合計38種)	(合計28種)

- 1) †印の鳥は現在繁殖していない種。△印の鳥は新たに繁殖するようになった種。S印は夏鳥。
- 2) ヨタカやウグイス, センダイムシクイ, キビタキなど, 一時的な特例繁殖は除いた。
- 3) それぞれの欄の順序は, 出現頻度を基準にしたが, おおまかなものである。

とんど占められている」と説明できる。しかもその違いは単に種構成だけでなく、質そのものの変化も含んでいた。

社会を浮彫りにする都市鳥研究

ヒヨドリはかつては巣を見つけにくい鳥とされていた。それが最近では逆に人間に見られるような場所に営巣する例が増えている。そのいくつかの例を具体的に調べてみると、どうも人に頼っている節がうかがえる。わざと人が生活している近くで子育てをし、天敵からヒナを守ろうとしていると思われる。オープンネストの鳥にとって、現在の街の中の捕食者はカラスである。人間が見ているところにはカラスは近づかない。ヒヨドリはどうもその点を利用していると考えられる。同じような例は古くから人家に営巣しているツバメでみられ、近年増えてきた人工建造物で営巣するキジバトについてもいえそうである。また全国的に有名になった大手町・三井物産のカルガモについても同じ線で説明できる。

しかしこの考え方には一つ的前提が必要で

ある。「人間が鳥にとって敵でない」ということである。かつては鳥を見れば石を投げ、鉄砲で撃ち、巣を見つければ卵やヒナを取っていた日本人が、最近では「野鳥は愛すべきもの・保護すべきもの」という考え方に変わってきた。それは愛鳥思想の普及であり、失われていく自然への愛着でもあると思うが、それ以上に経済力の豊かな社会のゆとりと見ることができる。

都市鳥（としちょう）。それは我々が勝手につけた造語であるが、街に住む鳥の生態を一つ一つ追ってみると、人間や社会との結びつきの多い、今までにない野鳥の世界を見ることができる。同じ鳥でも街に住むのと田舎に住むのでは違いがあるのではなからうか。都市という人工環境に適応した鳥のグループがいるのではなからうかと始めたこの調査は今、社会現象との結びつきをも含む、すそ野の広い研究へと進みつつある。あなたもこの都市鳥を調べてみませんか。

（かわち ひろし 都市鳥研究会事務局長）

アカショウビン！ （軽井沢探鳥会に参加して） 砂川真栄（東京都）

5月最後の土曜日、夜行日帰りで日本野鳥の会埼玉支部主催の軽井沢探鳥会に出かけた。出発の日の東京は汗ばむほどの陽気であったが、日の出前の軽井沢は肌寒く、持ち合わせの雨具を防寒用に着用してもなお寒さは抜けなかった。しかし今回の探鳥会はアカショウビンとの初めての出会い、オオルリの鮮明な色合いを十分に堪能できた。声は大きいが体



アカショウビン
・ツブポウソウ目
カクセキ科
全長27cm

の小さいミソサザイをやっとみつけたこと等実りの多いものであった。

列車は23時59分予定通り発車した。ビールで喉を潤しているうちに軽井沢駅に到着。駅から

タクシーで小瀬林道入口へ。

あちこちで鳥のさえずりが聞えたが、鳥を識別するほどの明るさではなかった。それでもリーダーの一人が今のは〇〇鳥だと説明すると思わず双眼鏡をのぞいたりする人もいた。次第にウォッチャーたちの気持の高ぶりが感じられた。

夜が明けて最初に見つかったのはキセキレイだった。ヒヨドリ・アオジと続いて、遠くの木の手ッペンでオオルリを見つけたが、遠すぎて色合いを鮮明にみるまでに至らなかった。我々は小瀬林道を野鳥の森へ向って歩いた。しばらく歩いたところで誰かがオオルリを見つけた。今度はかなり近距離だったのでルリ色が鮮やかに識別できた。初めて見るすばらしい色合いだった。このまゝ帰っても悔いはないと思った。

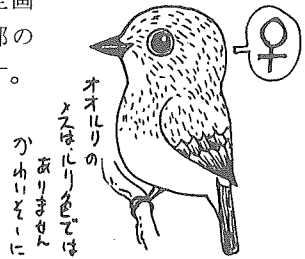
歩くうちに段々足が重くなり眠気をもよおしてきた。睡魔と戦いながら歩いていると目

の前に赤いものが見えた。双眼鏡をのぞいてみるとアカショウビンだ。思わず「アカショウビン！」とさげんだ。

アカショウビンはカワセミやヤマセミと同様にウォッチャーにとってはもっとも見たい鳥の一つではないだろうか。私はウォッチングを始めて5年程経つが初めての出会いであり、しかも突然のことで本当に感激した。

今回の探鳥会を企画してくれた埼玉支部の皆さんに感謝します。機会がありましたらまた参加させて下さい。

(カッタ・比企 裕)



探鳥情報

- キアシシギ ◇5月7日、浦和市秋ヶ瀬で4羽(草間和子)。◇5月10日、鴻巣市大間の荒川で2羽(榎本秀和)。◇5月25日、寄居町の正喜橋で1羽(吉野由紀夫、岡林克信)。
- ツグミ ◇5月11日、熊谷市大麻生で1羽(今井明巨)。◇5月16日、毛呂山町西戸で1羽(水村 実)。
- チュウシャクシギ ◇5月14日、坂戸市多和目で2羽(水村 実)。
- コムクドリ ◇5月14日、坂戸市多和目で♂1羽(水村 実)。
- カッコウ ◇5月16日、越生町下広谷で(鈴木暁子)。◇5月18日、所沢市下富で(前田章一)。◇5月20日、毛呂山町川角で(松本孝章)。◇5月30日、所沢市久米で(加藤 均)。
- サギのコロニー ◇5月17日、朝霞市内間木でゴイサギ中心にコサギ、アマサギが100羽以上(海老原美夫)。◇6月18日、春日部市円谷大池通りの竹林にコサギ、チュウサギ、アマサギ、ゴイサギが約100羽(西村雅敏)。◇6月22日、松伏町赤岩でコサギ、ゴイサギ、アマサギが50羽以上(山部直喜)。
- キンクロハジロ ◇5月25日、狭山市の昭代橋で♀2羽(狭山市児童館野鳥観察会で)。
- メボソムシクイ ◇5月26日、北本市石戸宿で2羽。しきりにさえざる(遠藤修司)。
- ツミ ◇5月30日、大滝村で1羽(水村 実)。
- ホトトギス ◇6月1日、大宮市日進町で1

- 羽(森本國夫)。◇6月1日、所沢市下富で1羽(藤原寛治)。◇6月5日、江南村で1羽(水村 実)。
- アオバズク ◇6月1日、浦和市の秋ヶ瀬公園野鳥園で1羽(池田琢朗、館 貴之)。◇6月14日、午前2時、浦和市中尾の自宅前の屋敷林で鳴く(草間和子)。
- ダイサギ ◇6月1日、大宮市の深作調整池で1羽(遠藤修司)。
- イワツバメ ◇6月4日、熊谷市石原で巣立ちヒナ3羽(今井明巨)。◇6月28日、浦和市の白幡沼で5羽(海老原美夫)。
- アオゲラ ◇6月5日、日高町梅原で1羽(水村 実)。◇6月6日、越生町で1羽(水村 実)。◇6月9日、毛呂山町宿谷で鳴き声(水村 実)。
- ヒクイナ ◇6月8日、浦和市大谷口の埼玉幼稚園近くの水田で1羽(近藤 崇)。
- ツバメの部分白化 ◇6月8日、浦和市大谷口の遊水池で背中白い個体が1羽(近藤 崇)。
- キビタキ ◇6月9日、毛呂山町宿谷で♂1羽(水村 実)。
- タマシギ ◇6月10日、浦和市田島の田島中学校付近で♂がヒナ3羽を連れてチョコチョコ(田島中学校バードウォッチングクラブ)。
- チョウゲンボウの巣立ち ◇6月9日、朝霞市で4羽のヒナ無事巣立つ(福井 亘)。
- カイツブリの親子 ◇6月28日、浦和市の白幡沼でヒナを連れたペアが数日前より2回目の巣作りを始め、再び抱卵開始。巣で抱卵中の親鳥のそばにかなり大きくなったヒナが浮いていて時々えさをねだっている不思議な光景(海老原美夫)。



野鳥や自然の好きな方、どなたでも歓迎。
受付は探鳥会当日です。予約申込みは必要

8月10日(日) 熊谷市 大麻生(定例)

— 涼風を求め、大麻生へ —

午前9時30分秩父鉄道大麻生駅前集合(秩父鉄道熊谷9:09発→大麻生9:18着/秩父鉄道寄居9:12発→大麻生9:32着)。旅の途中の、シギ、チドリの第一陣が、期待できます。他におなじみのカワセミも。(担当=鈴木忠雄、堀越照雄、今井明巨)

8月17日(日) 浦和市 三室地区(浦和市立郷土博物館共催・定例)参加費無料。

— 夏真っ盛りの三室 —

午前8時15分北浦和駅東口又は、午前9時郷土博物館前に集合。午後1時ごろ解散。芝川の干潟では、タカブシギやクサシギに再会できるでしょう。

(担当=楠見邦博、福井恒人、森本國夫)

8月22日(金)~23日(土) 親子自然観察会

秩父郡両神村ふるさとキャンプ場にて、秩父愛鳥会共催で親子自然観察会を開きます。22日午前9時30分秩父鉄道三峰口駅前、または午前11時現地へ集合。23日午後3時48分三峰口発上り電車で帰る。参加費は、大人も子供も4,000円(食事3食、巣箱材料代)。バス代は別。22日の昼食は持参。親子で参加(小学校高学年以上なら個人参加も可)。参加したい人は、埼玉県栄養専門学校の今井明巨まで申し込んでください。

8月24日(日) 千葉県 谷津干潟

— 干潟に舞うシギ・チドリの群れ —

ありません。

筆記用具、雨具、昼食、ゴミ袋、もしあれば双眼鏡(なくても大丈夫)などをご用意ください。小雨決行です。

参加費は、一般=100円、会員と中学生以下=50円

午前9時15分武蔵野線西船橋駅到着ホーム中央付近集合(新秋津7:59→北朝霞8:12→武蔵浦和8:20→南浦和8:24→南越谷8:36→西船橋9:11着)。近県5支部の合同探鳥会。シギ・チドリをゆっくり楽しんで、ついでに他支部の人もウォッチング&シャベリング。(担当=海老原美夫)

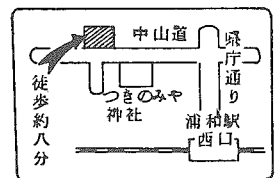
9月7日(日) 鳩山町 越辺川

— 秋風わたる休耕田 —

午前8時30分東武東上線高坂駅前又は、午前9時鳩山町公民館石坂分館集合。(朝霞台7:49→川越8:08→高坂8:29着/武蔵浦和7:26→大宮7:35→川越7:54→東上線へ乗換え。高坂駅から鳩山ニュータウン行バス乗車)鳩山町中央公民館共催。参加費無料。12時ごろ解散。さやさやと葉をならして秋風の気配。水面をよぎる鳥影は何。(担当=海老原美夫)

8月9日(土) 野鳥写真教室

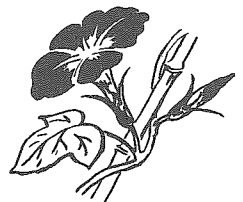
午後3時~6時、浦和市立コミュニティーセンター2階、和室の第1講座室。本部総務部長園部浩一郎さんのお話は、インドや中国などの野鳥のスライドも見せてくれる『野鳥写真の楽しさ』。そして、あなたのスライドも見せてください。お待ちしております。(担当=海老原美夫)



お知らせ

あなたのフィールド(観察地)を、会員みなさんに紹介してみませんか。10月号は、そのマイフィールド特集です。どうぞ、ふるって投稿してください。形式は自由ですが、交通手段や略図をそえるとわかりやすくなり

ます。字数は700字以内(略図別)。しめ切りは8月25日、事務局宛にお送り下さい。首をアオサギにしてお待ちしております。(編集部)



探鳥会報告

6月8日(日) 熊谷市 大麻生

人 23人 天気 晴 鳥 コサギ カルガモ コジュケイ キジ イカルチドリ イソシギ コアジサシ キジバト カッコウ ヒバリ ツバメ セグロセキレイ ヒヨドリ オオヨシキリ セッカ ホオジロ カワラヒワ スズメ ムクドリ ハシボソガラス(20種) コアジサシのダイビングが見事だった。ゴルフ場建設の工事がかなり進み、自然の破壊を目の当たりにして何とも言えない思いであった。

6月15日(日) 浦和市 三室地区

人 103人 天気 晴 鳥 カルガモ コチドリ キジバト カッコウ ヒバリ ツバメ イワツバメ ハクセキレイ セグロセキレイ ヒヨドリ オオヨシキリ セッカ サンコウチョウ シジュウカラ ホオジロ カワラヒワ スズメ ムクドリ オナガ ハシボソガラス ハシブトガラス(21種) 雑木林では、サンコウチョウの鳴き声が聞かれ、見沼用水には、カルガモの親子。カルガモの親が子をかばうのがいじらしかった。でも、3面舗装の水路からうまく上がったのか心配。

6月22日(日) 越谷市 増林地区

人 21人 天気 曇 鳥 コジュケイ シラコバト キジバト ヒバリ ツバメ イワツバメ ハクセキレイ ヒヨドリ オオヨシキリ

シキリ カワラヒワ スズメ ムクドリ オナガ ハシボソガラス ハシブトガラス(15種) 梅雨の中休みの1日。お目当てのシラコバトはたっぷり見られたが、3日前の大雨による増水で巣が大打撃を受けたらしく、オオヨシキリの数は少なく、セッカの姿も見当たらなかった。しかし、来年の越谷の探鳥会にはご期待下さい。近くに発見されたサギのコロニーがコースに入ります。

7月6日(日) 北本市 農事試験場跡地

人 41人 天気 曇 鳥 カルガモ サシバ コジュケイ キジ ヒクイナ キジバト カッコウ アマツバメ カワセミ コゲラ ヒバリ ツバメ ハクセキレイ セグロセキレイ ヒヨドリ モズ オオヨシキリ セッカ シジュウカラ ホオジロ カワラヒワ スズメ ムクドリ オナガ ハシボソガラス ハシブトガラス(26種) 予報に反してまずまずの天気。サンコウチョウは残念ながら見られなかったが、サシバをたっぷり、じっくり。獲物を捕って食べるころまで見られた運の良い人も。また、キジの母子が道路を用心深そうに横切る風景も皆を喜ばせた。

6月14日(土) 野鳥写真教室

人 21人 全国の鳥仲間のスライド100枚にプラスして、当日みんなが持寄り発表したスライドがなんと200枚以上。たっぷり楽しんで、この教室はますます充実。今月号の表紙は、その内の1枚でした。

—森のなかまのぬいぐるみ展—

バードカタログでもおなじみ、落合いこさんのあのかわいいぬいぐるみの展示会が、〈SAVE THE BIRDS—この鳥を救おう〉の国会キャンペーンに呼応して行われます。会場ではオリジナルの鳥や動物500点が、おいでをお待ちしております。会場で即売も行い、売り上げの一部は当会に寄付されます。

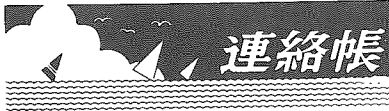
○場所 積雲画廊(渋谷区神宮前1-19-14)

TEL (03)478-0993

○日時 8月20日(水)~25日(月)

A M11時~P M7時(最終日5時)





第3回初級リーダー研修会

支部活動の中心的役割を果たす探鳥会。その探鳥会の成否を決めるのはリーダーです。探鳥会の開催地をひろげるためにも内容を充実させるためにも、より多くのリーダーが求められています。リーダーの資格は、まず支部会員である事（これ、当たり前）。そして、鳥の識別能力よりも、より良い活動を目指す「熱意」の方が必要です。

無償のボランティアですから、正直言うと、金銭的にはもちろん、あまりトクする事はありません。しかし、自然保護活動の最前線を受け持つことになる訳です。あなたの力を貸してください。（ほら、野鳥たちもお願いして……いるかどうか……）

参加希望者は、事務局までご連絡を。

講師・藤本和典本部指導部主任

日時・8月31日（日）午前10時～午後3時。

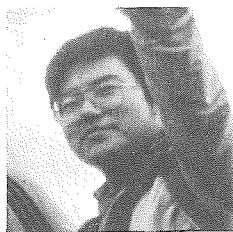
場所・浦和市立コミュニティーセンター2階
第1講座室

参加費・無料

わ忘れていました

『しらこぼと』の編集部長が交替していたのを、ご連絡するのを忘れていました。2月号から山部直喜（右写真）が担当しています。

こんな顔つきのあやしげな男を見かけましたら、『しらこぼと』



についてのご意見などを話してやってください。だいじょうぶです、かみつきますから。

会員数は

7月20日現在で635人です。

事務局日誌

- 6月7日 環境庁主催の環境大学（所沢市公害研修所）野外実習に講師として出席（海老原）。
- 10日 千葉県支部と打合せ。合同探鳥会について。27日にも。
- 15日 編集部会議。
- 17日 長期滞納者整理作業。会員数集計。
- 18日 本部総務部と打合せ。新会員制度への移行について。
- 21日 研究部会議。
- 25日～27日 『しらこぼと』発送準備。
- 26日 本部総務部と打合せ。『バードニュース』（本部から支部役員への連絡誌）送付先について。
- 28日 『しらこぼと』7月号袋詰め（ボランティアたった4人）。30日発送。



連絡帳の欄は私が担当しています。山部編集部長が泣いていやがるのに顔写真を掲載した責任者は私です。見にくいものをお見せして申し訳ありません。

編集部員のF君は、部長のことを、アオバズクによく似てると陰口をたたいています。別名ヤマベズクなんて言う人もいます。

（海老原美夫）

題字『しらこぼと』：日本野鳥の会会長・山下静一

（イラスト風見出し・鷹尾正済）

『しらこぼと』	1986年8月号(第27号)	頒価100円(会費に含まれます)
	発行人 今井昌彦	発行所 日本野鳥の会埼玉県支部
発行所事務局 〒336 埼玉県浦和市岸町4丁目26番8号	プリムローズ岸町107号	
電話 0488(32)4062		
郵便振替 東京9-121130	銀行振込口座	埼玉銀行浦和支店普通預金316990
印刷所 望月印刷株式会社		

（無断転載を禁じます）